

## 戦争体験を次世代に 秘話、日野原重明さんの思い継ぐ同志

読売新聞社編集委員 阿部文彦

7月18日は聖路加国際病院名誉院長で超高齢社会のカリスマとして敬愛された日野原重明さんの4回目の命日だった。日野原さんが生前、力を注いだのが75歳以上を会員とする「新老人の会」だ。自立して健康に生きるだけでなく、日本のよい文化を次世代に伝え、世界平和の実現に貢献する……。そんな国民運動を目指した。戦争体験の伝承のため、多くの会員が手記を持ち寄り、何冊もの本を出版した。「新老人の会」の足跡を追った。

### ★「新老人の会」会員 机を並べた学生が戦犯で絞首刑に

手元に「歌われたのは軍歌ではなく心の歌—語り残す戦争体験」（新日本出版社）という「新老人の会」が編んだ本がある。2001年から05年にかけて書かれた会員の戦争体験記の単行本から42編を収録し、10年に出版された。1925年生まれの畑中九州男さんの「『戦争体験を語り継ぐ』ことの大切さ」との手記に目がとまった。

畑中さんは東京の「水産講習所」（現・東京海洋大学）を、終戦間もない46年に卒業した。机を並べた仲間に、田口泰正さんという復学した元学徒兵がいた。田口さんは戦争末期、沖縄県石垣島の守備隊の小隊長だった。上官の命令で墜落した米空軍乗員を殺害した罪に問われ、1950年、東京・巣鴨プリズンで絞首刑となった。

<戦争さえなかったら、彼も余生を子や孫たちに囲まれて過ごすことができたであろうに>

学友の無念の死に思いをはせる畑中さんの手記には、「後日譚と称した文章が書き加えられている。ある日の新聞記事に畑中さんも知らなかった秘話が掲載された。石垣島には田口さんがたびたび訪れていた民家があった。6歳年下の当時16歳だったその家の娘さんと、散歩をして語り合う間柄だったという。そして、その女性が畑中さんと同じ兵庫県内に暮らしているというのだ。畑中さんは「新老人の会」に女性を誘った。入会后、兵庫支部の「戦争体験を語り継ぐ」サークルとともに活動した。

田口さんについては、ジャーナリストの森口豁（かつ）さんが93年に著した「最後の学徒兵 BC級死刑囚・田口泰正の悲劇」（講談社）が詳しい。それによると、田口さんは拘置所で日記をつけており、死後、実家のある北海道小樽市に住む家族がほかの遺品とともに引き取ったという。

### ★南の島での散歩 語り合ったのは夜光虫、プランクトン

「心の歌」を詠み進めて驚いた。1929年生まれの大浜有子（たつこ）さんが「ある死刑囚の日記」というタイトルの手記を載せている。まさに田口さんとともに散歩をした女性である。

彼女は田口さんの実家を訪ねたようだ。手作りの日記帳を読んだ感想も記している。＜（彼は）海が大好きで、目を輝かせながらいつまでも語り続けた夜光虫やプランクトンの話が、その頃の唯一の思い出。刑執行間近のある日に読んだ、「いきおいて語り居たるに赤潮のプランクトンの名思い出さず」は忘れることのできない歌となっている＞

実は、大浜さんを小樽に導いたのは、森口さんの著書だ。1996年「最後の学徒兵」が文庫化された際の後書きで、関西の女性から寄せられた手紙に触れている。＜（私は）昭和4年生まれ、石垣島出身。当時、田口さんと少しばかりの知り合い＞「少しばかり」との言い回しが奥ゆかしい。だが、読み手は察するはずだ。この人は田口さんの恋人だったので、と。森口さんの驚きは想像に余りある。

### ★その後の活動 意気盛んな会も

「新老人の会」の事務局長を長く務めていた石清水由紀子さんを訪ねた。盛期には会員1万2200人を数えた会は日野原さんの死後、全国組織の運営が難しくなり、2019年に終了した。現在は、本部は日野原重明記念「新老人の会」東京として、都道府県ごとにおかれる支部は独立した組織として活動している。石清水さんは17人の世話人の代表だ。石清水さんは日野原さんとともに度々、兵庫支部にも足を運んだ。「お二人のことは存じ上げています。一緒に戦争体験を子供たちに話したこともあったようです」と振り返る。

27歳で絞首台に散った学徒兵の同窓生が、その人となりを紹介し、南の島で出会った初恋の女性が思い出を語る。そんなこともあったのだろうか。私も聞いてみたかった。

消息を聞いた。畑中さんは数年前に亡くなり、大浜さんは兵庫県から転居した後、連絡がとれないという。兵庫は日野原さんが幼少期を過ごした地でもあり、支部の運動は活発で、年に6～10回程度、小学校で戦争体験を語る集いを開いていたが、コロナ禍もあり、活動を休止している。

会の名誉のために、元気の出るエピソードも紹介しよう。熊本「新老人の会」は今も約200人の会員を擁し、出演者はもちろん脚本、演出も自前という演劇、カラオケ、俳句、川柳、城下町を歩く会、一人暮らしの高齢者と会員が語らうオープンハウス『KATARO』などの活動を続けている。もちろん、その柱は「戦争を語り継ぐ会」だ。戦争の記憶を記録に残す場として、「演奏と平和のミュージアム」をつくる運動も進めている。88歳の小山和作会長は、「戦争の悲惨さを目で見て、肌で感じ、体験した人がいなくなりつつある。次の世代に繋ぐのは私たちの責任だし、使命でもある」と話す。

日野原さんがまいた種は今も、新たな実を結んでいる。＜一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ＞（ヨハネによる福音書より）日野原さんが好んだ聖書の一節だ。

### ★初恋の人の日記とともに

2006年、朝日新聞の社会面に「獄中日記 初恋の人に」というコラムが掲載された。大浜さんが田口さんの実家を訪れた際、日記を家族に託されたという。「自分のひつぎにこの日記を入れてもらおうと、大浜さんは思っている」と記事は締めくくられる。

ベッドに横たわり、日記に目をこらしているのか。それとも、天国の浜辺で田口さんと夜光虫の話に花を咲かせているのだろうか。戦後76年の夏、静かに流れる二人の時を想う。